永久

愛埜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永久

【Ｎコード】
Ｎ５５４６Ｖ

【作者名】
愛埜

【あらすじ】
「不死について研究しているんだ」そう言った彼は、此処にはもう居ない。彼と共に過ごした時間は、余りにも短かすぎた。

1―1―1

とある小さな居酒屋。
幅広い年齢層に支持されている。なかでも、生徒や学生の客が多い。ここの店主が馴染みやすい、ということも理由の一つだろう。
今日も、部屋に多くの若い客で溢れている。

「・・・あの席」
「どうしたんだい？」

赤い髪の少年が指さした席には２つの席が。

「何で２つだけ空けてんの？」
「……あの席は、とあるカップルの席なんだ。」
「そのカップルは今日来んの？」
「さあ、どうだろうね。２人一緒にってのは、ここ１３年見てないよ。」
「１３年！？」
「そう、１３年。其処に写真があるだろ？」

額に入れられた一枚の写真。大勢の人が写っている。

「若っ」

写真の左端には若かりし頃の店主の姿が。

「それは、この店の開店初日に撮ったものなんだ。」
「もしかして、ここに写ってるのって初めてのお客さんだったり？」
「そういうこった。で、その中央に居る２人が……。」

中央の2人だけ、別の空気を纏っている。

「この幸せそうな大学生カップル？」

「2人とも大学生じゃないよ。彼氏は確か、２５歳」

「社会人？」

「ちがう、大学院生だよ。医学部だったかな…その後は院に行って博士号をとるんだって言っていたよ」

「よく覚えてますね。」

「そりゃ、初めてこの店の暖簾をくぐってくれたんだから。それに、よく来てくれていたしね。」

「そうっすか…。どっかで見たことがある気がするんだけどなぁ……。彼女の方は？」

「彼女はまだ１２歳」

「へ？」

少年は間抜けな顔になる。

「その年でこの色気！？俺よりも年下の少女って感じじゃなくて、完全に大人な女性じゃないっすか！」

「俺も驚いたよ。彼女が彼の横に並んでいても全く見劣りしない。見ていて美しいカップルだったよ。まさにお似合いだった。」

「年の差は感じなかったんすかね？」

「どうだろうね。……ただ、出会いは不純だった、って彼女は良く言っていたよ」

「それ、どういう意味…」

「立ち入った質問はしない事にしているんだ。」

「そうっすよね～。ハハハ」

「で、そっちの写真。」

２人だけで写っている。見つめ合って、笑っている。
彼女の頬には一筋の涙が。

「一枚目の一年も経たない内に此処に来てくれた時、俺が勝手に撮ったんだ。確か、その日は彼女の１３歳の誕生日だったんだよ。」
「それでどうして泣くんすか？」
「さぁ～。それは知らないよ。本人に聞かないことにはね……。」

店主は懐かしそうに目を細める。

「これを撮ったのが最後だったよ。２人で一緒に此処に来たのは…。」

2―1―1

―――夜の街

其処ら中にカップルや夫婦が肩を組み、手をつないで歩いている。

そこに、この時間にこの場に居ることが異質な少女が一人。　漆黒の長い髪を背に流し、その肌は陶器のように白い。

『ねえ、お兄さん。今ヒマ？』

『……。』

ベンチに一人座っている男に少女は声をかける。

『ワタシ、を、一晩だけ買わない？あ、それじゃあ、話し相手になるからさ。』

『金、困ってんの』

少女は何も言わず、男を見る。

そんな少女に、男は自分の横に座るよう促す。すると、案外大人しく少女は座った。

『……いくら欲しいの』

男は少女の肩に腕を回し、耳元で囁く。

『・・・君が払っても良いって、思った分だけ』

少女の肩に添えられていた手が、背を伝い腰へと下ろされる。少女はそれに、身を窄める。

『あのさ……』
『フジサキくーんっ！こんな所で会うなんて、もしかして運命！？』
何処からともなく現れた化粧の濃い女。近づいてくるたびに、香水のにおいが強くなる。
『だからさぁ～。私と付き合ってよ！』
『悪ぃけど、』
フジサキと呼ばれた男は、横に座らせた少女の腰を自分に引き寄せる。
『俺にはコイツがいるから。行くぞ。』
『えっ…うん』
男は少女を立たせる。
『こんな高校生のガキのどこが良いのよ！』
女は叫ぶ。
『こんな公共の場で出会う度に叫ぶような女はお断りだ、って毎回言ってんだろっ。』
そう言うと、男はタクシーを引き留め少女を押し込むように乗せる。
女はまだ何か言っているが、男は気にも留めずに乗り込み、タクシーは走って行った。

2―1―2

『入って』

男に言われるがまま、少女は部屋に入る。

此処は、高級マンションの最上階。若い男が1人で暮らすには贅沢過ぎる。

『あの……』

『どうした……あぁ』

男に対して臆している様子ではない少女の表情に、男はすぐに彼女が言いたいことを理解する。

『あの女は前からしつこかったんだ。これで付き纏われることも無くなるだろ。』

そう言って男はコートを脱ぎ棄てる。

『自己紹介がまだだったな。……その辺に座って。俺は藤咲檜（ふじさきかい）。今は大学生の２３歳。』

『ワタシは……風見瑠維（かざみるい）。』

『高校生？』

『違う、１０歳。』

『げ……まだ義務教育すら終わってねえのかよ。…とにかく、座って。』

今度は驚いた顔で同じことをもう一度言われ、瑠維はやっと腰を下ろした。

『学校は？』
『学校には一昨日から行ってない。』
『家は、親は』
『蒸発した親が知らないうちに売却していたみたい。頼れるような親戚なんて、居ないし。……もう、何が何だか分からなくって。』

瑠維は力いっぱい自分の体を抱きしめる。まるで不安から自身の身を庇うように。

『どうして俺だったの、話しかけやすかった？』

あの時の檜はすこぶる機嫌が悪かった。
とてもじゃないが、近寄りがたい雰囲気があっただろうに。

『……君だけだったんだよ。』

顔を真っ赤にしてうつむき加減で言う。

『かわいい』

そう言って、檜は瑠維の横に膝立ちになり目線を合わせる。

『一晩だけ、って言ってたけど。そのあとどうすんの』
『……そんなの』

今を生きるだけで精一杯。瑠維の黒い目がそう訴えている。
そんな瑠維の両肩に檜は手をのせて言う。

『じゃあさ、こうしよう。』
『？』
『一晩だけじゃなくってさ、俺に残り一生分売ってくれ』
『！？』

瑠維の目が見開かれる。
まさか、そんなことを言われるとは思いもしなかったのだろう。
『俺って学生だから、こんな広い部屋に住んでても滅多に掃除も出来ねえし困ってんの。』

そういうことか、と瑠維は理解する。
『……僕を見捨てたりしない？』
『捨てるくらいなら拾わねえ』

今にも泣き出しそうな瑠維に向かい、檜はそう言ってニッと笑った。
この一言で、契約は成立した。

こんな僕の言い分に一切反論せず耳を傾けてくれた

そんな彼に対する感情が
ｌｉｋｅからｌｏｖｅに変わるのも時間の問題だった

動機は不純だった
でも、僕があの時
彼に対して抱いていた感情は
純度の高い水晶よりもずっとずっと透明で
地平線の彼方は勿論、どこまでも見渡せるほどに透き通っていたんだ

2―2

『どうして‘僕’なんだ？』

２人での生活が始まって、もう１ヶ月になろうとしていた。

『初めて会った瞬間だけ‘ワタシ’だったじゃねえか。』

『‘ワタシ’の方が女の子っぽいじゃないか。……あの後のことを考えたらその方が良いだろって、思って……。』

『……。』

『で、‘僕’なのは、親への反抗。』

瑠維は忌々しそうに顔を歪ませる。

『美しく、綺麗で、可憐な女性になって良い家に嫁ぎなさいってずっと言われ続けてた。親の言いなりに為るつもりなんて一切なかったから。でも結局……親の思いの通りにされたんだけど。』

『そっか』

檜はそれ以上追究することはなく、再び教科書へと視線を落とす。

それが、瑠維にとっては堪らなく詰まらないものであったが、邪魔をしてはいけない。医学部の５年生である檜は他学部と比べて暇ではない。

今日は、滅多にない２人そろっての休日と云えた。

『……。』

瑠維も学校から出された宿題に目を落とす。しかし、もう終わってしまってやることがない。

携帯を取り出し、開ける。そこには数通、メールが届いていた。
瑠維は親と離れてからも同じ小学校に通い続けている。毎日のように顔を合わせているにもかかわらず、毎日のように友達から短文のメールが届く。

『どうした？』

檜が不思議そうな顔で、携帯の画面を見つめる瑠維に問う。

『なんでもない』

瑠維は顔を上げずに答える。
メールの内容はどれも極めてシンプルなものだ。

“困ったことがあれば連絡して。”“変なことに手を出しちゃいけないよ。”“うちに来る？”“変な男に捕まってない？”

学校に行くたびに、このような言葉を教員からかけられる。そして、友達からもこのようなメールが届く。
詳しいことを話さない瑠維に責があるのだが、出会いが悪すぎて周りに話し出すことができない。

『嘘だ。話してみろ。』
『っ』

親でさえ気づかなかった、瑠維の嘘をいとも簡単に檜は見抜く。

『どうして‘嘘’だと思うのさ』
『目、合わさねえで答えた時はだいたいそうだろ』

何言ってんだとでも言いたげに、その男はさらりと答えた。

『どうした？』

瑠維が気付いた時には、向こうの机にいた檜は瑠維の後ろに立っていた。

そして、携帯を取り上げてメールを見る。

『あっ、ちょっと！』

『あぁ・・・・・・こんなこと気にしてんの？』

瑠維は下を向く。

『……まあ、俺について何も話してねえしなぁ。仕方ねーか』

そう言って、檜は瑠維の横にあった椅子に腰をおろし、瑠維に顔を上げさせる。

そして、窓の外を指さして言った。

『おれは、そこの大学の医学部生。』

小学生の瑠維でも、大学はだいたい見当が付いていた。近所に医学部のある総合大学は限られている。

それは、国内でトップの学校。

『見ての通り、親とは離れて暮らしてる。』

『……どうして、こんな所に住んでいるのさ』

バイトをしていない大学生が、マンション。しかも最上階とはどういうことか。

『親のコネでちょっとな……』

しかも、医学部に通っているのだから、檜は相当な金持ちの息子だと考えて良いだろう。

『附属病院に実習に行きながら、学校では研究もしてる。まあ、どっちかっていうと研究の方に力を注いでるんだけど』

『研究？医者になるんじゃないの？？』

『別に、本当は医学部じゃなくて理学部でもよかったんだ。でも、生命の根源を調べるってより、生命の根源を覆したかったから医学へ進学したって訳だ。』

『……。』

おまけに、とても勉強ができる。

『研究していることは……もしこれが成功すれば犯罪だろうな』

『そんな、危ない研究って？』

『危ない研究、か。間違ってはないな』

誰にも言うな、とでも云う表情でまっすぐ瑠維を見て檜は言った。

『不死についてだ』

3―1―1

秋風が吹く。2年なんて歳月は本当にはやく過ぎる。
この過ぎ去っていく一秒一秒が、とてつもないくらいに短い。

『今日、誕生日だよね。何かほしい？』
『何かくれるの？』
『僕からあげれるものは少ないけど』

瑠維は檜を見る。

『じゃあさ、一緒に行きたい所があるから、夜の予定は明けといて。寝たりすんなよ。ちゃんと、それなりの時間に帰って来るから』
『わかった』

檜は今日で25歳。大学を卒業し、今は大学院生。
瑠維は12歳。夏生まれ。
やっと小学校の最高学年。まだ義務教育は終わらないけれど、確実に大人への階段を駆けあがっている。

『だから、今日は早めに帰ってくる。』
『初めてだね。君が、僕と外に出ようって言ったの。』
『そうだな』

檜は小さく笑って、靴を履く。

『行ってくる。ちゃんと、学校に行けよ。』
『わかってるよ。大体、僕が学校をさぼった事なんて一度も無いだ

ろ？』
『ははっ、そうだったな。じゃあ、いってきます。』
『……いってらっしゃい。』

パタン、と静かに扉が閉められた。
ただ今の時刻、午前七時。

3―1―2

『いらっしゃい！君たちが第一号のお客さんだよっ！！』
『久しぶりだな！』

店で出迎えたのは、檜と同い年くらいの男。

『そちらのお嬢さんか？』
『ああ、瑠維だ。瑠維、こいつは俺の親友、緑川俊介。』
『は、はじめまして。』
『檜から嫌と云うほど話は聞いてるよっ。話の通り、可愛らしいじゃないか』

俊介の言葉に頬を赤くする瑠維。

『え、ほんと？』
『いやぁ、だってな～。』

俊介は檜を横目で見て言う。

『檜の口から女の話なんて滅多に聴いたことなかったんだから。それが急にどうした？どこでこんな可愛い子を攫って来たんだ？？』
『おい、ストップ。その話は止せって。第一、変な解釈を入れるな』
『恥ずかしがんなよ、お嬢さんも知りたいだろ？』

コクン、頷く瑠維。

『え、あ、ちょ瑠維っ。』

こんなに困った顔をする彼は初めてで。
瑠維はちょっぴり嬉しくなって。

『まあ、立ちっぱなしもなんだから、其処に座って。』

示されたのはカウンターの一番端。
店内が見渡せる一番奥の席だ。

『檜ってのは羨ましいくらいモテるってのに、告白してきた女の子を端から振って行くような薄情者なんだよ。そのうちの1人くらい俺に紹介しろってんだ。』

言いながら、御手拭きと御冷を差し出す。
俊介が話している間、檜は諦めたかのように押し黙っている。

『で、そんな男の口から女の話が出て来たってだけでも驚いた。しかもそれが・・・』
『うるせー。』
『だってよー、誰だって驚くだろ。第一、』

ヒソヒソと、俊介は声のトーンを数段階落として言った。

『檜、あの厳しい御袋さんには話したのか？』
『…話した。』
『わお。』
『？』

話の流れに瑠維は付いていけない。
檜の親に関しての話も今、初めて聞くくらいなのだから。

『親父さんはあんまりそういうことを気にしないタイプの人だろ？自身が結構なプレイボーイだって話だし。』
『ああ、親父（おやじ）は文句ねえだろうよ。あの人は見た目が全てだと思っている様な男だ。性格は演技でどうにかしろって言うだろうよ。』
『うわ・・・まあ、そう言うだろうな。』

俊介は檜の両親についても詳しい。
親友、であると同時に幼馴染。
檜よりも一足早く同じ大学の経営学部を卒業し、はやくも自分の店を持ってしまった。

『ああ、社交場で恥をかかなければ問題ないって考えなんだよ。俺の親父は。』

瑠維は黙って話を聞く。
檜の口から直接語られる家族について。
二度と忘れない様に、心に刻みつけるかのように。

『だが、御袋は違う。家柄と聡明さが必要だと思ってる。』
『『聡明さ？』』

檜の話を聞いていた2人が口を合わせる。
そして、先に口を開いたのは瑠維だ。

『良い家の娘ってさ、皆賢くないの？』
『そうとも限らねえ。親のコネで良い所に就職、もしくは親の会社に行けば良いと思ってる連中は勉強なんかしてねえんだ。』
『檜の御袋さんはそうとう努力家で勉強熱心だもんな…。なにもしてない人間は皆大っ嫌い、だろ？』

『・・・ああ。』

檜は御冷に手を付ける。

『何か食べれる物だせ。腹減った。』
『坊ちゃまの仰せの通りに。へーへー。』
『その態度止めろよ…。どうした、瑠維？』
『…なんでもない』

そう答えた瑠維を見た檜の目がすぅっと細くなる。
信じていない証拠だ。
だから、瑠維は目を合わせない。

『何？』
『いや、なんでもないのなら・・・』

彼の口から家族について瑠維に語られたのは、後にも先にも、この時だけだった。

3―1―3

なんとなく気まずい空気が流れていた。
扉が乱暴に開け放たれる音がした。それに3人は過剰なまでに反応する。

『ちょっと、俊介っ！水臭いじゃないっ！！』

立っていたのは、立派なカメラを片手に持った茶髪の女性。
少し息が上がっており、急いで来たのが分かる。

『あら、檜じゃない。久しぶり・・・お隣は？』
『この前話してただろ、瑠維だよ。』

その女性は少し低くて豊かな声で話す。

『本っ当に可愛らしいわね。はじめまして、私は檜や俊介と同じ大学に通ってた美津濃（みずの）あづさ。』
『はじめまして、美津濃さん。』

瑠維はぺこりとお辞儀すると、あづさは笑った。

『檜・・・どこで攫ってきたの？』
『おい、俊介と同じ事言うなよ。』
『え！これと同じ思考回路だなんてっ！・・・最悪』
『そこまで言わなくても良いじゃないか』

仲良し三人組の会話に、またしても瑠維はついていくことが出来ない。

それが分かったのか、檜は瑠維をそっと自身へと引き寄せた。他の2人には気付かれない様に、かつ極て自然に。

『檜、お前からも何か言ってくれよ。』
『似た者同士、仲が良くて結構なこった。』
『檜がそう言うなら仕方がないわ、認めてやっても良いわよ。・・・あ、瑠維ちゃん。私からお願いがあるんだけど。』
『何でしょう？』
『話を逸らすのか？』

あづさに話しかけられた瑠維は、首を軽く傾げて返事する。
しかし、俊介の言葉に腹がたったのか俊介を睨みつけて言った。

『あら、念願叶ったのは全部私のお陰だってのに、その恩を忘れるような行為をしてくれてるような義のない男にズベコベ言われる筋合いないわ。ね、檜君』
『そうだな』
『あ、檜！裏切ったな！！！』

カウンター越しに檜を掴みかかろうとする俊介は一店舗の店主には見えない。

『あんな煩いのは放っておいて・・・。瑠維ちゃん、私の事を‘あづみお姉さん’って』
『あづみお姉さん？』
『きゃ～、私って一人っ子だから、そんな可愛く言ってくれる妹みたいな子って居ないのよ！』

そう言って瑠維に抱きつく。

『良い子だから、俊介の言う事は信用しちゃだめよ。もし、何かあったら私に相談してきなさい。』
『はい、有り難うございます。』
『じゃ、記念に一枚もらいます。』

カシャッ

『モデルさんが美人だから…綺麗な写真が撮れるわ。』
『おい、あづみ。開店記念に一枚撮ってくれよ。』
『他のお客さんが来て満席になったら撮ってあげる。』

あづみがそう言った途端、お客さんが一気になだれ込んできた。

『あの～、開いてますか？』
『もちろん！今日からだからね。さ、お好きな所へどうぞ。』

まるでタイミングをはかったのようだったのだが、偶然だったらしい。
俊介は接客をしに引っ込んでしまった。

『あづみ、それ、フィルム入ってんだろうな。』
『何疑ってるの？そんなこと一度も・・・』

そう言いながら確認する。そして、ほっとしたような表情になった。

『・・・そういえば一回だけあったわね。よく覚えてたわね。』
『だって、あれは高校の修学旅行だったろ。あれだけ騒いでたら嫌でも覚えてる。・・・で、あったのかよ。』
『ちゃんと入ってたわよ。これから店はお客さんでいっぱいになる

だろうし。約束は守らなきゃ。・・・その写真ってどうするのかしらね。』

あづみの疑問に答えを提示したのは瑠維。

『店内に飾る、とか？』

『それ良いわね！で、毎年増やしていくの。』

『それまで続くか？』

檜が冷たい事を言う。

しかし、これが現実なのだから仕方がない。

店を続けて行くと云うのは、並大抵のことではないのだから。

『続けさせますとも。だって、私が投資したんだから、ね。・・・・・今日開店だったなんて知らなかったけど。』

『あとで懲らしめるしかねえな』

『お願いね、檜。』

1－1－2

１３年前、美津濃あづさが撮った写真。
今でも尚、色褪せずにその存在感を十二分に放っている。
初めてそれを目にした客が、全員いつのものかを問うてくるくらい。

「さ、少年は帰る時間だ。」
「保護者同伴でも？」
「同伴じゃないくせに聞くな。さ、帰った。」

そう言うと、赤毛の少年は友達に声をかけに戻って行った。
これからは酔っ払い達の時間だ。
純粋無垢な少年たちには縁のない時間。

「ごちそうさまでした・・・・あと、オッサン。」
「何だ」

少年はそんなにも写真に興味を持ったのか、それとも開けられている席が気になるのか。

「俺って何歳に見えてる？」
「どうでもいい質問だな。」
「良いから、答えろって」
「中学生か？」
「いや、次の春から中学生。・・・今、俺の知ってる人は１３歳だけど、５年前に引っ越しちまった。」
「何が言いたい。」
「別に。じゃ、また来ます。」

赤毛の少年は、不可思議な言葉を残し店を出て行った。

「最近の若いのは・・・・・・」

頭をかくしかなかった。

4―1

人生の転換期。
そんな言い方は大袈裟だが、間違いなくその一つに数えても良いのが入学と卒業だ。
早咲きの桜が舞う。

『皆、名簿順に並べ。』

担任の言葉に従って皆は段の上に立つ。

『前列で座ってる女子は膝を閉じろ。おい、ネクタイ曲がってるぞ。』

このような会話はもう長くは無い。
あと一カ月もしないうちに入学式を迎える。
皆がバラバラの学校で。

『証書の入った筒は・・・そう、綺麗に斜めに持って・・・・・・。』

皆が言うとおりに持ったことを確認して、担任は真ん中に座る。

『暗い顔すんじゃねーぞっ』

小学校、最後の写真だった。

4―2―1

『卒業、おめでとう。』
『ありがとう。』

もう、桜吹雪のかな行われた卒業式は一昨日に終わっていた。
なぜ日にちがたってからの言葉となったかと云うと、それは檜は相変わらず暇では無いから。
こうして2人が顔を合わせるのは久方ぶりだった。

『・・・やっと小学校を卒業か。何か欲しいものとかある？』
『……ッ、物じゃ、ないけど。・・・望み、なら、ある。』

少し黙った後、そうたどたどしく言いながら、顔を真っ赤にして口を噤む瑠維。
その意味が解らない檜。

『ま、とりあえずあるんだろ。出かけるぞ。』

どこへ、と聞かずとも行き先はわかっていた。

『うん』

何かあるたびに足を運んだ、行くと何時も席は空けられていた。
どんどん繁盛していく店。
忙しく接客をしていても店内に入った瞬間、一瞬だけでも視線を返してくる檜の親友。
そんな彼がいるあの店へ。

4―2―2

『いらっしゃい、って相変わらず仲が良いな～。羨ましい、羨ましい。』

『嘘を吐くの、大概にいろよ。瑠維、やっぱり、こいつの言う事は信じるんじゃねえぞ。』

『どうして？』

瑠維はキョトンと檜に問い返す。

『自分もアイツと仲良くやってる、ってことだ。』

『だから嘘吐き？』

『ああ』

『2人とも酷いな・・・』

俊介は眉をひそめて言うが、口にしたほどにはそのように感じていないようだ。

『俊介・・・・・・結婚、しねえの？』

『『結婚！？』』

檜が何気なく言った一言に、なぜか瑠維までもが過剰なまでに反応する。

『・・・って、誰と？』

『あれ、瑠維ちゃんは知らなかったっけ？知らないなら、知る必要はないよ。』

そう言う俊介に檜は間髪入れずに言葉を挟む。

『この前に会ったあづさと俊介は婚約までしてんの。』
『そうだったんだ…。』

眼をキラキラさせて見られた俊介は、瑠維に嘘をつき通すことなど出来なくて。

『こっちの親は勿論、あっちの親にも挨拶に行ってなくってさ・・・。』
『早く行けよ。もう大丈夫だろ。』
『でもさ・・・』
『許婚との婚約を解消させといて今更なんだよ。』

檜の言葉に、俊介は目を丸くさせる。

『どうして知ってるんだ?』
『・・・あづさから聞いてなかったのか?』
『ええ、言ってないから俊介は知らないわよ。』
『あ、お姉さん』
『瑠維ちゃんじゃないの、相変わらず可愛いわ!』

そう言いながら瑠維に抱きつきカメラを片手に持つあづさに俊介と檜は驚く。
店の扉はきっちりと閉められているので、開けて閉めたと云う事だが、その音さえも気が付かなかった。

『それより、なんだよ。どうしてその事を檜が知ってるんだ?』

いつまでも驚いている事を止め、俊介は檜と向き合う。

『俺とあづさは、』
『従兄妹よ。』

そうなんだ、と余り驚いていない瑠維。
驚きのあまり、口を開閉させるだけで声が出ない俊介。

『ま、言ってなかったから俊介がこうなるのも仕方がないわね…。』

まるで、憐れむかのようにあづさは俊介を見る。

『…だから、檜はあづさについて俺より知ってたりするのかよ・・・なんか悔しいな。』
『俺より、は言いすぎだろ。ちゃんと言葉を選べ。』
『婚約者の存在なんて、俺はあづさからじゃなくて檜から聞いたんだからな。瑠維ちゃん、これって酷い話だろ？』

どんどん弱気になって行く俊介を、もはや2人は気遣う事を止めた中、話しかけられた瑠維はそうにはいかなかった。
俊介に向かって問いかけてみる。

『でも、教えてもらってなかったら、今頃どうなっていたの？』
『それは…』

ちらり、と俊介はあづさを見る。
非の打ちどころがない彼女。
才色兼備とは彼女のための言葉だと、俊介は初めて会った日に思ったものだ。

『そんなの答えは簡単。』

あづさは俊介を見ずに答える。

『今頃、美津濃の会社を存続させるために何処の誰かも知らない人と結婚させられていたはずよ。』

嫌そうでもなく、かといって、嬉しそうでもなく。

さらりと言ってのけたあづさに俊介は驚愕。

『おい、あづさ。』

『檜みたいに、』

口を挟む俊介を無視し、あづさは続ける。

『男だったらそんなことは無かったでしょうね。でも、女だから…。美津濃の家は男系家族。女が家を継ぐなんてことは今までなかった。』

口早に話すあづさの声に、感情は籠っていない。

檜は、黙ってコップに口をつけた。

それをあづさは優しい眼差しで見る。

『檜のおかげでしょうね…。こうしていられるのも、全部。』

『今更だろ。』

あっけらかんと答えた檜にあづさは微笑む。

この2人は、誰がどういう風に見てもお似合いだ。

『あづさは許婚の事を心底嫌ってたみたいだし。』

『そうね、許婚だった人は本当に馬鹿だったんだから・・。』

『ははっ・・・俺はあづさも俊介も好きだから、2人に、ロミオと

ジュリエット，になってほしくなかった。』

ロミオとジュリエット。

敵対する家の息子と娘が恋に落ち、家に刃向い結ばれようとする話。

『ま、俊介はロミオじゃねえけど。』

『おい、檜。良い話だと思ったらソレはねえだろ。』

『いいじゃない、事実なんだから。ね、瑠維ちゃん。』

『え、あ、はい。』

いきなり話を振られて瑠維は戸惑う。

『ちょっと、瑠維ちゃんは俺の味方になってくれよ・・・』

そう言いながらも、どこか嬉しそうな俊介。

瑠維にとって、3人の会話は眩しい。

近くに居るのに何処か遠く。

なにか、別の世界の話しのようにさえ聞こえてくるから不思議だ。

『思ったけどさ。俊介っていつも客に料理持ってくるのが遅くないか？』

『それは檜に対してだけだよ。つい会話が弾むもんだから。』

そう言いながら奥へと引っ込んだ俊介。それを追うあづさ。

この2人もまた、お似合いなのだ。

店内には、檜と瑠維の2人だけになった。。

『そういえば、瑠維。どうしようか？』

何が何を、が抜けているが瑠維には檜の言わんとしている事が正確に分かった。
此処に来たのはその話、瑠維の卒業祝いについての話、をするためだった。

『・・・あのね、』

真っ赤になりながら、瑠維は檜に顔を近づけて耳元で呟く。
檜にだけ、聴こえるように。

『・・・わかった。』

この、この答えが欲しかったんだ。
ずっと、ずっと、焦がれていたその答えをもらえる事を。

『瑠維』

そう言った檜の顔が瑠維に近づく。
そして、キスされた。

『・・・』

瑠維が驚いて見ると、そこには檜の笑う顔。

『泣いてんじゃねえよ』

優しく言う彼の顔は、今も瑠維のまぶたの裏に焼き付いて離れない。

1―1―3

意味深な言葉を残して出て行った赤毛の少年。
その言葉の意味を反芻して考えるが、見つからない。
そこに扉が開けられる音。

「いらっしゃい。」

入ってきたのは、1人の女性客。
年齢は20代だろうか。品のある美しい子。
その手には大きな花束を抱えている。

「お久しぶりです。」

その言葉の意味が解らなかった。しかし、すぐに理解する。
彼女とは、この場で初めて会った。
それは13年も前の出来事。
彼女が此処に来る時は、決まっていつもある男と一緒だった。

「・・・本当に、久しぶりだね。綺麗になった。」

何年振りだ。
噂をすれば影、とは本当の様だ。
ならば、彼女の年齢はおのずと分かる。今、26歳だ。相変わらず、良い意味で年相応には見えない。
あの、腰まであった長い髪は肩でバッサリと切られていたせいで、俊介は一瞬誰だか解らなかった事は黙ってあの時と同じように名を呼ぶ。

「瑠維ちゃん。」

今日もあの時と同じように、何処か妖艶で幼い少女のように微笑んだ。

4―3

とある異変。
それに逸早く気がついたのは、本人ではなく医大生の彼だった。

『どうした』
『？』
『最近、ますます何も食べてねえみたい。』

檜が瑠維と初めて出会った時。あの時でさえ細かったのだが、今はその比ではない。
華奢を通り越しそうになっている。

『何が食べられる？』
『・・・食べる気になれない。』
『俺、もうちょっとふっくらした子が好きなんだけど。』
『…食べる。』

おそらく、檜と共に食事をしていないときは食べていないのだろう。
ただでさえ、食材が入っていない冷蔵庫の中が変わっていかないのはそれが原因。
久しぶりの休日なのだ。
普段は瑠維が作るのだが、今日は檜が調理場に立つ。瑠維の制止を振り切って。

『そこで大人しくしてろ。』
『わかった。』

とある異変。
それにまだ、本人は気付いていない。
『近いうちに病院にでも行け。』
『やだ、診てくれればいいじゃん。』
『嫌でも行って来い。』
そっぽむく瑠維だが、檜は強く言う。
『瑠維、お願いだから。』
その異変に、本人は気付かなければならない。

4―4―1

『そうか。』

冷静に答えてはいるが、檜は一瞬自分の耳を疑った。
携帯電話越しに伝えられた言葉は予想していたものだったけれど。
なぜか、瑠維の声が遠く聴こえる。

『・・・どうしたいんだ。』

平日の昼間、昼休み。
檜も研究や授業で、決して暇ではない。

『俺は、瑠維の言葉が知りたいんだ。俺は瑠維の答えを否定しねえし、突き放すつもりもない。』

電話の向こうでは、すすり泣く声が聴こえる。
しかし、これは、俺が答えを与えても良いものではない。

『瑠維の決定が正しいんだ。正しいと思うようにすればいい。俺はサポートするから。』

ありがとう、と聴こえてきた。その声はもう、すでに何かを決心した様な様子。

『構わねえよ。瑠維・・・』

俺の呼びかけに瑠維は、何、と聞き返してくる。
その声さえも愛おしいなんて言えば、今周囲に居る同輩には笑わ

れてしまうが。

『愛してる。』

そして、俺は一方的に通話を終了した。

『妊娠、したみたいなんだ』

4―4―2

『で、檜は腹を括ったって訳か。』
『るせー。』

ここは大学構内。
檜の横に座るのは、親友・俊介。

『…手を出すのが早いな～。俺だってまだ。』
『おい、さっさとしねえと、あづさに逃げられるぞ。そうなったら、俺の今までの苦労もこれからの苦労も全部水の泡だ。』
『そうだったな。』

あの時の事は今でも鮮明に思い出せる。
台風が近づく、ある日の事。
美津濃家の者にあづさとの縁を切れと俊介が言われた時、その隣に居た檜が言ったのだ。

『“俺が自分の家とあづさの家の両方の会社を継ぐ”って云う前代未聞でカッコいいことを言ってくれたよな・・・。しかも、それが周囲に受け入れられた。・・・それは、人徳と頭脳があるからだもんな。』

しみじみと話す俊介に、檜は苦笑いする。

『今でも、どうしてあんなことを言えたのか分からねえよ。今じゃ、絶対に言えない。』
『この前は俺たちの事を思って言った、みたいなことを言ってたくせに。』

『・・・それも一因だ、ってことだよ。その奥にあるはずの真意は本人でさえ解ってねえ。』

あの日とは違い、よく晴れた空。

『どうして俊介がここに居るんだ』
『あー、檜に報告しに来た。』
『さっさと言え、俺も暇じゃねえんだ。』

ベンチから立ち上がり、檜は俊介を見下ろす。
風が、檜の羽織る白衣を翻す。

『俺、今晩行ってくる。行って、あづさの親御さんに会ってくる。』
『会ってくれると良いな。』
『なんだよ。普通、頑張って来い、とか言うところだろ。』
『あーあー、精々頑張って来い。』

応援してる、そう言い残して檜は去って行った。
残されたのは俊介と大きな桜の木に留まる小鳥だけ。

『これから、檜は大変だな。俺以上に。』

瑠維から檜への電話。
聞いた本人はさぞかし驚いたことだろう。

『・・・まだ、瑠維ちゃんって13だよな。何してんだよ、檜。』
『俊介？』

知り合いも少ないはずの校内で声をかけてくるものなど無いに等しい。

『あづさ??』

それはあづさだった。

『こんなところで何してるの』

『檜に話してた、今晩の事。』

『そう、・・・頑張りましょ。俊介となら、大丈夫な気がするから。』

大丈夫な気がする、それが魔法の様に聴こえた。

1―1―4

「開店して１３周年ですね。今日からは１４年目に突入か…。」
「そうだね。・・・わざわざ来てくれるなんて嬉しいよ。」

瑠維が差し出してきた花束を受け取る。

「其処の席が空いてるから。」
「ありがとうございます、俊介さん。」

そう言って、先ほど赤毛の少年との会話のネタになっていた椅子に案内する。

そう、この席は瑠維たちのためのもの。

「元気そうで良かったよ。なんてったって、１４年前の今日に初めて会って、それから何かがあるたびに此処に来てくれててさ。姿を見せなくなったのが１３年前。」

この話をするのは憚れたが、この店と彼女を語る以上、こうなってしまう。

それが解らず此処に来る程、目の前の女も馬鹿では無い。

「もう・・・？」
「大丈夫ですよ。でなきゃ、ここには来れない。彼との思い出がたくさんのこの店には、ね。」

なにかふっきれている様な、そんな印象を俊介は瑠維に受ける。

「僕、今は大学院生なんです。」

「そうなんだ…。どこの？」
「同じですよ。」
それだけで解った。
相当勉強したのだろう。俺たちと同じあの大学だ。
「入って、知りましたよ。彼って大学内でも凄かったんですね。」
「そりゃあ、賢くてスポーツも出来て、行事にはちゃんと参加していたからね。」
「色々な伝説があちこちに転がっていて…。何も知らなかったんだな、って思い知らされて…。」
そう言って瑠維が顔を下ろしたものだから、泣いているように見える。
しかし、続けられた声にそのようすは一切ない。
「僕は彼の研究を受け継ぎました。」
代わりに、危険な色があった。
それならば、彼女が泣いていた方が良かったのにと思ったのは罪か。

4―5

彼女は随分と長い間、目が覚めなかった。
１３と云う年齢での大仕事、妊娠・出産。
世間からの目、自分の求める幸せ像。
その２つの間にあるズレを目の当たりにし、それに正面から衝突しつつも逆らい続けて来た。
疲れたのだろう。
皆はただ、彼女の目が再び開くことだけを願った。
何も、皆でこの世から居なくなる必要はないのだから。

こんなに可愛い少女を置いて、貴方は一体どこへ行ってしまったのです

目が覚めた少女に、大人は容赦なく現実を突き付けた。

『約束が違うっ』

そう泣き叫ぶ少女の声を聞いていられなかった。

数日前、この病室で彼と共に幸せそうに笑っていた面影は一切なく。
長い間眠っていたにもかかわらず、疲れきった表情。
幼い彼女は外見は随分大人っぽく、いつ見ても年相応には見えなかった。でも、今は余計に、大人っぽくを通り越して、年相応には見えず老けて見える。

『どうして、僕を1人にしないで・・・！』

彼女は再び、1人になった。
愛おしくて仕方がない彼と最愛の子の両方が、共に彼女の手から抜け落ちたのだから。

こんなに可愛い少女を置いて、貴方は一体どこへ行ってしまったのです

彼女は年相応に儚く脆いと云う事は、誰よりも貴方が一番知っていたのに

5―1

彼の死後、僕は彼のお母さんに拾われた。
だから、そのまま、彼と過ごした部屋に1人で暮らしている。
寂しかった。
でも、そんなこと、口が裂けても言う資格など無い。
彼と出会っていない人生を考えたら、比較すれば、これは幸せなのだ。
だって、彼からは沢山の夢と希望、そして、受け取れないほどの愛情を貰ったから。
そんな生活の中で、ある一室には立ち入らなかった。
それは彼の部屋。
彼の部屋の物には一切触らないでいた。
だって、彼の部屋だから。
触れた瞬間、彼の帰るところが消える気がして。
そんなある日、彼のお母さんに呼び出された。
大学も決まり、入学後に向けて勉強中のことだった。

とあるビルの一階にあるカフェ。
待ち人はすぐに来た。
その姿を認めて立ち上がる。

『お久しぶりです。』

彼の死後、初めて対峙する。

『元気そうで何より。何か食べる？』

優しそうな、そんな女性。

若く見える彼女が彼の母親。

『…それより、本題に入りましょ。座って。』

言われて、再び席に着く。

彼女は忙しい身。

なぜなら、彼が、本来ならあづさお姉さんが、継ぐ予定だった会社の社長だから。

因みに、彼の父親はもう一方、元々彼が継ぐ予定であった方、の会社の社長。

『これを渡す時が来ました。』

そう言って差し出された一通の手紙。

それを受け取り、宛先と差出人を見る。

驚いた。

『貴女があの子と同じ大学へ進学することがあれば渡してほしいと言われていたの。』

風見瑠維様。

藤咲檜。

『ほんと、不思議な子…。』

走り書きされてはいるが、読みやすい綺麗な字。

『今、私はあの子が残した言葉の通りのことを貴女にしています。
もし、あの子よりもいい人に出会えたときは遠慮せずに言いなさい。
藤咲は貴女の前から消えるから。』
『開けても』
『どうぞ。それは貴女のものだから。』

話を遮るように訪ね、丁寧に開封する。
そこに書かれていたことは、要約すると、彼の研究について。

その後、真っ直ぐ家に戻り、もう一度手紙を読み返した。

瑠維のことだから俺の部屋を触っていないと思う
でも見てほしい
本棚の一段目、右端に俺の書きかけの論文があるから
気が向いたら見て

これだけだった。
初めてもらった、彼からの手紙の内容は。

5―2―1

手紙を受け取って、中を読んでから一週間が経過した。
これを放置するつもりは一切なかったのだが、なぜか、行動する気にはなれなかったのだ。
1人で寛ぐには広すぎるリビングの真ん中で、もう一度手紙を見つめる。
一体、彼は何を伝えたいのだろうか。
それを見れば、論文を読めば、彼が考えていたことが少しでも理解できるのだろうか、近づくことが出来るのだろうか。

気付けば、動いていた。

施錠されていない部屋は、思っていたよりも簡単に開いた。
吸い込まれる様にして中へと入る。
数年間、誰も入らず閉ざされ、待っても帰って来ることのない主の為だけに存在していた空間。
その床には埃が厚かましく鎮座し、カーテンは無言にも色褪せようとしていた。
後で掃除することに決め、瑠維は目的を果たすべく動く。
嫌でも目につく、部屋の奥で存在感を放っている本棚。
その背の高い本棚の右端。
分厚い本が並ぶ中、そこには、黄色くなった紙の束が。

壊れ物を扱うかのようにそっと手に取り、中を見る。
彼の論文は途中で止まっていた。
このご時世に、何らかの意図で手で書かれた論文。
中身は全て英語で書かれており、知らない単語が多い為だけに今

の瑠維では全文を解読することができない。
そんな彼女でも、唯一解った、惹かれた単語が一つ。
“ｇｅｎｅ”
その日本語訳は、“遺伝子”。
彼は以前、瑠維に一度だけ言葉短く言った。研究しているのは‘不死について’と。
この単語がどのように彼のあの発言とリンクしているのか。
そもそも、彼の言う‘不死’が世間一般の知られている意味と一致しているのか。
今の瑠維に知る術は無い。
『言ってくれなきゃ、教えてくれなきゃ・・・わかんないよ』
泣いても、背をさすってくれる彼はもう居ない。
居なくなって、もう、５年も経つのに。

彼の居ない世界に、まだ慣れない

居なくなって、もう、５年も経つのに、知らない彼が増えていく

5―2―2

毎日が研究で忙しかった彼は、三者面談は勿論、運動会や学芸会にも顔を出さなかった。
今になって思う。
どうして無理を言って来てもらわなかったのだろう、かと。

毎日、朝早くに家を出て、夜遅くに帰って来る。帰って来ない時もあった。

彼はただ、僕に“不死”についての研究をしているとだけ言った。
詳しいことは聞かなかった。だからか、彼はそのことについて何も言わなかった。

彼が僕に話さなかったことは多い。そのうちのひとつが、家族について。
だから、僕が彼について知っていることは少ない。

第三者から知らされることが多かった。

今になって思う。
どうしてわがままを言って話してもらわなかったのだろう、かと。

些細なことを知らないことに後から気付く。
気付くのが遅すぎた。
もう、今では彼の声すら聞けぬと云うのに。

6－1

彼の研究について、‘不死’について、瑠維は今一度考え直した。
そのきっかけは、卒業研究。
ここでは、三年次から卒業研究に取り掛かる。

皆が集まる桜の木の下。
進級したばかりの者たちが、大学構内の桜林の麓(ふもと)で、花見という名の酒盛りをしている。

『あのさあ、皆、卒業研究ってろーすんの？』

酔っ払って、眠りだすものが出て来た時、この中に居たうちの１人、マリ、が言いだした。
呂律が回っていない。

『わたしは・・・南先生のトコがいいな～って。で、新しい植物、花を作る！』

そう答えるのは、瑠維と同い年のアスカ。

『そーゆーのって、卒業してから作るんじゃらいの？』
『へ？』
『やっぱり酔ってる？』
『ちょっと、それはマリの方じゃない？』

『あーあーあー、聞こえん。・・・アスカはさ、先生のところでは原理について研究したら良いんじゃないかな～って』

三年になったばかりで、そのような事まで今はまだ考えていない者が大多数だろう。

その中で、アスカはまだ考えている方だ。

『うー。その方が現実的かも。瑠維は？』

いきなりアスカから話を振られて、瑠維は答えられない。

『え、あ・・・まだ考えてない。』

『そうだよね、この時期で具体的にアスカみたいに考えてる人の方が少ないよね。』

酔いは覚めたのか、いつもの口調に戻ったマリが早口に話す。

『とりあえず、今までやってきたことの集大成ってトコでしょ。』

『そうだね。』

瑠維には苦く笑うしかなかった。

皆が自分の意思で研究内容を考え決めて行く中で、自分だけが他人の意思を受け継ごうとしていたのだから。

不死とは、単に死なないと云う事を示すのか。

それとも、彼にとって別の意味が存在するのか。

今の瑠維でも、その真意に辿り着くことが出来ていない。
その為に行動に出る。　誰に何と言われようと。

6－2

桜の花が散った頃、不意に開けられた研究室の扉。
いきなり、見知らぬ学生が入ってきたものだから中の皆は驚いたのだろう。
何せ、ここは医学部のとある研究室。

『はじめまして、』

この場に居ることがさも当然のことかの様に堂々と入ってきた彼女に注目が集まる。
そのような視線を気にも留めず、ハイヒールをツカツカとならし教授の座る椅子の前へと真っ直ぐ歩を進める。
そして、名乗りもせず、いきなり話し始めた。

『貴方は13年前に亡くなった此処の院生。彼・・・藤咲檜について何か覚えていらっしゃいますか。』
『・・・ああ、彼の事はよく覚えているよ。』

いきなり現れた学生に、50歳代にみえる教授は物腰柔らかに答える。
そんなこの男性は、とある研究で早くにこの大学での地位を築き上げた凄い先生。

『研究内容についても？』
『ああ、何て言ったって、彼の研究は面白いものだったからね。・・・でも、彼の頭脳と行動力が無い今、その研究は止まっていてね。惜しいよ、本当に。』

彼を惜しむ言葉が欲しいのではない。
そんな事を思っているとは周囲に思わせないくらい、表情のない顔で学生は話を続ける。

『教授、ワタシがその研究の続きをする、と言ったらどうなさります？』

研究室に緊張が走った。
皆がその提案を口にしては潰された。あるいは、許可が下りなかったのだろう。

『あれをあのまま放っておくのは勿体ない、教授はそう考えておられるのではありませんか。』
『・・君は、一体、何者かね。』

裏表のない温厚そうな教授の眉間に少しだけ皺が寄る。

『申し訳ありません、申し遅れました。』

学生は姿勢をただし、教授と向き合う。
その真っ直ぐな姿勢と眼差しは、教授にとって、亡き藤咲と重なる。

『理学部生物学科、３年の風見瑠維といいます。』

周囲にざわめきが。
三年であれば、卒業研究に手をつける時期だ。
しかし、学部を超える事はまずない。

『理学部の学生がである君がどうして？』
『彼のやり残した事の清算を。それが・・・』
瑠維は一旦言葉を切り、教授に向かって表情を崩して言う。
『残されたワタシに出来る、唯一の事。』
『風見くん、君は・・・っ。』
教授は目を見張り、瑠維をまじまじと見た。
そして、少し笑んで言う。
『・・・わかったよ。私は海東守（かいとうまもる）だ。よろしく頼むよ。』
再びざわめきが起こる。
しかし、海東教授はそのような事は気にせず、椅子から立ち上がり、瑠維にだけ聴こえる声で続けた。
『・・・藤咲のお嫁さん。』
その言葉に、瑠維は周囲に妖艶だと言われる笑みで答えた。

1―1―5

「お邪魔しました。」
「まだ何も食べてないじゃないか」

早速帰ろうとする瑠維を俊介は止める。
それに対して、瑠維は表情の詠めない笑みで答え、店を出て行こうとする。
俊介には、急に来てさっさと去ろうとする瑠維が何を考えているのかが読めない。

「・・・ちょっと、瑠維ちゃん！」

しかし、俊介にはやるべきことがある。
それは、今は亡き親友から13年前に託されていたことで。

「預かっている物があるんだ。」

その一言で、彼女を引き留める事は簡単過ぎて。
振り返った瑠維はそれはそれは、苦い表情だった。

1―1―6

再び椅子に座った彼女以外の客は、もう帰ってしまった。
閑散とした店内。
ただ、ひたすら、黙っている瑠維に俊介はあるものを取り出して言う。

「13年前の今日から一週間前、」

すなわち、檜の誕生日の一週間前、この店の開店記念日の一週間前。
そして、彼たちが死ぬ一週間前。

「預かったものがあるんだ。」

そう言いながら差し出されたのは小さな箱と一通の手紙。

「これを“俺の誕生日に手渡してくれ”って頼まれていてね。でも、瑠維ちゃんとはずっと会えていなかったから今日になってしまったけれど。」

それは13年の時を想わせるもので。
手紙は少し黄色く、箱もすっかり古ぼけてしまっている。

「・・・。」

何も言わずに、瑠維は手紙を広げ始めた。
其れを広げる手を止めた時、その眼が一瞬揺れたのを俊介は見逃

さなかった。

「ひとつ、聞いても良い？」

俊介の返事を待たずに、瑠維は続ける。

「彼の死因って何。」

「え、」

当然、彼女はそれについて誰からか聞かされていると思っていた俊介は驚きを隠せない。

「僕は、彼は交通事故だ、って聞いているけれど。もしそうだったら、彼はどうして此処まで何もかも用意周到なのさ。」

このようによく喋る瑠維は俊介には初めてで。

いつも、檜の横でニコニコと微笑んでいた彼女の面影は見当たらず、

「何かの節目ごとに彼からの手紙が出てくるんだ。」

嘆いている様な、
泣いている様な、
笑っている様な、
怒っている様な、

「どうして僕には何も知らされていないんだっ！！！！！！！！」

そんな可哀想な目で叫ぶ姿は、今までの鬱憤が爆発してしまった模様。

「瑠維ちゃん、落ち着いて。」
「僕はっ、ぼくはボクハ・・・。」

このように慌てふためく姿も、気持ちのやり場に困っている様子も。
俊介にとって、そんな瑠維を初めて。
大きく、大袈裟なくらいに深呼吸をし、気持ちを無理にでも押さえつける瑠維の姿は見ている方が苦しい。

「・・・ごめんなさい。取り乱しました。」

そう言いながら前髪を掻き上げ、口に水を含む。
そして、止めていた手をもう一度動かし、手紙を広げた。
何かに打ち震える瞳の揺れはどんどん大きくなっていく。
読み終えたのか、その手紙をもう一度封筒に丁寧に仕舞い、小さな箱をキッと睨んだ。

「俊介さんの知る彼って・・・」

睨まれた箱は何も語りはしない。

「こんなに嘘吐きでしたか？」

勿論、手紙の内容を俊介は知らない。
しかし、瑠維の言いたいことと手紙の内容は容易に予想できるもので。

「違うよ。・・・でもね、」

彼女は彼の口から直接聞きたかっただけ、直接手渡してほしかっただけ。
未だ開けられることのない箱を俊介は手に取り、瑠維に両手で握らせる。

「これが初めてなんだよ。余裕がなさそうに願い入れて来たのも、誰かにモノを頼んだりすること自体が。何でもかんでも自分でやらないと気が済まない男だったから。」

他人に任せて失敗するようなリスクのある事は何でも自分で行っていく、それが藤咲檜だと俊介は思う。

「それに・・・こんな大切な事を自分の手で行えないことを恥じていた。もしかしたら、色々な人に何かしら願い事を残しているかもしれない。でも、俺が託されたこの願いは、一番、アイツにとって重要な事。」

親友であるからこそ託された、そう自負してもよいだろうか。
瑠維の瞳から大粒の涙が零(こぼ)れ、カウンターに落ちる。
声を殺して本格的に泣き出した。

「それくらい・・・」

わかっていると思っていたけれど。
そう漏らしてしまいそうになった俊介の言葉は、外には出ずに胸に仕舞われた。

6―3

彼が取り組んでいた研究は、瑠維にとっては相当厄介なもので。
というのも、厄介なのはその内容などではない。

『さっぱりわからない』
『君でも？』
『！先生っ』

誰にも聞かれてなどいないと思って呟いた言葉に返答があった。
研究室に居る人間は自分一人だけだと思っていた瑠維は、背後から声をかけられるまで海東の存在に気が付いていなかった。

『・・・そこまで驚かなくても良いだろ。』
『すみません。誰も来ないと思っていたので』

もう外は暗い。
研究室の窓から見える部屋と言う部屋の電気は消灯されており、構内に残っている学生たちも少ないことが分かる。

『まあ、早く切り上げて帰りなさいよ。夜は危険が沢山だから。』
『では失礼します。』

海東の言葉に従う形で瑠維は素早く席を立ち部屋を出た。
何か海東は言いたそうにしていたがそれも無視し、瑠維は少し乱暴に扉を閉め、目を閉じる。
‘こうすることで何か分かるかもしれない’
そのように此処に来た当初、瑠維はそんな馬鹿げたことも考えた

が、そんなことは実際ありもせず。
今でもこうして習慣の様に帰り際にこの行動を続けている自分が憎たらしく思えて来ていた。
そのまま、まっすぐ家へと帰る。
1人暮らしの学生には高級すぎるマンション、しかも最上階。
誰もいないその部屋は、何の温もりも与えてくれない空間であるはずなのに瑠維にとっては一番落ち着く温かい掛け替えのない空間。
幸せな記憶しか留めていないその空間に一日中、いや、ずっと籠っているというのに、未だに、瑠維には彼が生前考えていたことの一部分も理解できない。

『わからない』

彼との思い出に浸っても。
彼が何を思って、医者にもならず院にまで進学して、なぜこの研究に取り組もうとしたのか。
それさえ分かれば、絡まった糸が解(ほど)ける様に、瑠維が知りたいことの何もかもが解ってきそうなのに。
彼の残した意図が全く掴めずに、今日も瑠維は眠りについた。

1―1―7

最近、夢を見る。
夢を見ると云うことは瑠維にとって久しぶりのことだった。
過去に見てきた夢は全て良い思いのものではなく、彼と出会う前の嫌な思い出。
しかし、最近よく見るそれは違った。
どうしてかは全く分からなかったが、幸せを噛みしめていた。
目の前に居る誰かが瑠維に向かって微笑み、そして言ったのだ。
「　　」
その言葉に瑠維は笑い返し、返事をしようとする。
そこで目が覚めた。

目の前には何時もと違う風景。
それもそのはず、ここは俊介が経営する店。
瑠維は泣き疲れ、いつの間にか眠ってしまっていたようだ。
「起きた？」
「・・・」
まだ覚醒しきれない頭で状況を整理し終えた瑠維は真っ赤になっ

て俊介を見た。

「お客さんはもう皆帰った後だから気にしなくていいよ。」

そう言って、俊介は店の奥へと消えて行った。

瑠維の肩には俊介がかけてくれたのであろう毛布。

一人っきりになった店内で、瑠維は夢を思い出す。

誰かに何かを言われ、それに何か言おうとする。

毎回同じ所で夢から覚め、言われた言葉は毎回覚えていない。

「誰・・・」

無意識に触っていた彼からの最後の贈り物を開けようとして再び手を止めた。

そして手紙をもう一度見る。

よく見るとそこにはもう一枚紙が入っていた。

取り出してよく見るとそれは、

「馬鹿な男（ひと）・・・」

彼の名前と判子が押されたそれは、瑠維とかつてこの場で約束したもの。

そうなれば、この小さな箱のほうは嫌でも中身が想像がつく。

実は、それを見るまでに、何なのかは想像がついていた。だから泣いてしまったのだ。でも、でも。

この感情は瑠維の勝手気ままな我が儘なのか。それとも、

私はあなたを愛しています。
あなたは私を愛していますか、今でも。

1―1―8

彼の誕生日は、あと数時間で終わる。
瑠維は俊介の店を出、まっすぐ家へと帰宅した。
誰もいない部屋の電気も点いていないリビング、キッチン。
冷蔵庫を開けると其処には3つのケーキ。
無言で2つのケーキに蝋燭を一本ずつ刺し、火をつける。
ゆらゆらと揺れる火を見つめ、呟く。

「Ａｌｌｅｓ　Ｇｕｔｅ　ｚｕｍ　Ｇｅｂｕｒｔｓｔａｇ」

ドイツ語で‘お誕生日おめでとう’。
第二言語としてドイツ語を勉強した瑠維は、今や英語よりも得意となっていた。

「Ｕｎｄ　ａｕｆ　Ｗｉｅｄｅｒｓｅｈｅｎ」

‘そして、さようなら’
みるみる融けていく蝋燭をそのままにし、自分の目の前のケーキを食べた。
融けていく蝋（ろう）は、やがてケーキの上に落る。
しかし、それを瑠維が気にすることはなく、小さな炎はそのまま無情に燃え尽きた。

1―2

博士課程2年目。順調に進めば、後一年で博士号が取得できる。
ここからは、彼が歩む事の出来なかった境地。

見知った者たちは大学を卒業した者もいたし、瑠維と同じように院へと進学した者もいた。しかし、このご時世、博士号を取る者も取れる者も少ない。
理系学生はただの学士では就職し難く、また、博士でも難しくなる。
なので、大半が修士で院を卒業し、就職してしまうのだ。

彼の足跡を、半ば追う様にして進んできた。
その軌跡が途切れた今、一体何を思い何を考え進むのか。
これからは、‘彼’を言い訳にせずに進む。
自らの意思だけで。
明日を歩いて行くことが出来るのか、否、歩いて行くしかない。

言い訳する事をやっと止める。

素直であることを演じていた子供は、我慢することを覚えた大人になった。
天使であるふりをしていた餓鬼は、逃げる事を知った悪女となった。

言い訳をすることが出来なくなった。

彼を忘れることになると思っていた行動の全ては間違いなのだと、

ようやく気がついた。
今からでも遅くは無いだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5546v/

永久

2012年1月2日11時49分発行